

## 足立区基本構想審議会 第2回子ども専門部会 会議録

日 時 平成27年9月29日（火曜日） 午前10時から12時

場 所 足立区役所中央館 8階特別会議室

出席者 足立区基本構想審議会 子ども専門部会委員（10名）

村上祐介委員、野辺陽子委員、河本孝美委員、小林雅行委員、志自岐亜都子委員、早木美恵委員、渡辺ひであき委員、岡安たかし委員、鈴木けんいち委員、定野司委員

事務局：政策経営課長、基本構想担当課長、基本構想担当係長、(株)地域計画連合

オブザーバー：教育次長1名、学校教育部3名、子ども家庭部5名、地域のちから推進部1名、政策経営部1名

- 議題等
- 1 人口推計について（報告）
  - 2 第1回子ども専門部会における議論の確認について
  - 3 意見交換※「将来像」及び「将来像を設定した根本となる考え方（基本理念）」の考案
  - 4 事務連絡

資 料 【資料 17】 足立区人口推計

【資料 子⑤】 子ども専門部会 課題整理及び将来像等検討シート

## 1 人口推計について

基本構想担当課長：皆様おはようございます。定刻になりましたので、ただいまより足立区基本構想審議会第2回子ども専門部会を開催させていただきます。本日はお忙しいところご出席いただきまして誠にありがとうございます。本日のオブザーバー出席ですが、教育次長・学校教育部・子ども家庭部・地域のちから推進部・政策経営部の職員です。それでは村上部会長に進行をお願いしたいと存じます。

村上部会長：皆さんおはようございます。早くからありがとうございます。では早速審議に入りたいと思います。今日は議題が大きく三つあります。まず最初は報告ですが、それに先立ちまして配付資料の確認を事務局からお願いします。

基本構想担当課長：事務局から本日の配付資料の有無を確認させていただきます。最初に本日の次第です。続きまして資料17、足立区人口推計です。38ページございます。続きまして資料番号のない、表題が足立区の非正規雇用者比率についてとあるものです。続きまして、同じく資料番号のないA3版の足立区教育大綱案です。続きまして、委員の皆様のみになりますが、橙色の冊子、平成27年度足立区基礎学力定着に関する総合調査調査結果報告書です。続きまして、A3版の資料子⑤と表示の子ども専門部会課題整理及び将来像等検討シートです。これは前回配付の内容を更新したものです。続きまして、資料番号のないA3版の第1回子ども専門部会のまとめというものですが、これは前方のホワイトボードの内容をお手元用に印刷したものです。最後に前回の会議録についてですが、本日は間に合いませんでした。大変申し訳ありませんが、本日のところは先ほどの資料子⑤の内容を元に代えさせていただきます。会議録は次回に配付させていただきたいと存じます。以上、資料にご不足はございませんか。以上です。

村上部会長：ありがとうございます。では次第に入りたいと思います。まず次第1ですが、人口推計について前回議論の中で出てきていましたので報告をお願いします。これについての資料を事務局から説明をお願いいたします。

基本構想担当課長：それでは資料17、足立区人口推計をご覧ください。まず表紙を1枚めくっていただいて3ページです。人口推計の実施目的について挙げておりますが、(1)の基本構想の策定に当たっての基礎資料とあります通り、この審議会でご議論をいただく上で活用していただきたいと存じます。その他、区の方でも基本計画や地方人口ビジョンを策定するための基礎資料として活用してまいります。

次に4ページ、5ページをご覧ください。推計方法について表にいたしました。例えば、人口の自然増減について生残率という、現在居住する方が1年後に何人ご存命かとか、出生率がどのぐらいかなどの計算は、国の研究所が示した数値等を用いてお

ります。足立区は日本全体の場合と同じく自然減の状況です。一方、人口の社会増減については、表の下から2行目の項目、移動率で町丁目ごとに転出入実績の推移を元に推計しました。ただし、移動率については足立区の場合、ここ最近での転入超過が著しく大きな調整が必要でした。まず拠点開発や大型マンション建設等があった地域は、大きな転入実績があったわけですが、建設終了後もそれまでの転入実績で計算し続けることは出来ません。逆に表の一番下の項目。将来の開発動向の通り、千住大橋駅付近や六町などのように開発が継続している地域。それから千住1丁目などのように予定がある地域は、転入者数や期間を個別に推測して推計しました。これらの調整の関係で、人口推計の報告が本日にまで遅れてしまいましたこととお詫びさせていただきます。

個別の開発動向については、12 ページ、13 ページをご覧ください。ここから以後はエリアデザインの7地区などを中心に、主な転入・転出の推計方法を記載いたしました。ご覧のページは千住地区についてです。13 ページの表における低位推計・中位推計・高位推計とは、転出入の人数を大きく見込むか小さく見込むかということになります。この表の場合、千住橋戸町などにおける建設予定の内容が明らかですので、低位・中位・高位とも同じ見込み数です。めくっていただいて14 ページの北綾瀬駅周辺は、千代田線の利便性向上による開発が予想されますが、具体的な建設予定が現時点では分からないため、低位・中位・高位と異なる転入者数を見込みました。以後、15 ページの竹ノ塚駅周辺、16 ページの六町駅周辺、17 ページの花畑地区、18 ページの江北地区、19 ページの綾瀬地区や西新井・梅島地区です。

次の20 ページ、21 ページは都営住宅やUR住宅についての個別調整内容です。特に都営住宅については、建て替えにより空地が生じる場合に、民間住宅が建つことによる転入も想定しております。

なお、ここまでは社会増減の説明でして、これに自然増減の推計値を合算したものが、その地域ごとの人口推計となります。開発規模によっては、合計で人口が減少する地域もございます。

続きまして、26 ページをご覧ください。足立区の総人口における推計結果です。表で開発による影響を最大に見込んだ高位推計と、中間的な中位推計、最小の低位推計の三つで示しました。中位推計で見ますと、平成32年、東京オリンピックの年が人口のピークで68万2,000人強。今年の1月より約8,000人以上増えます。つまり数年間は開発などにより転入超過となります。その後は自然減が上回って減少を続け、表の水色で示した平成58年。新基本構想の期間を30年間とした場合の最終年には、61万2,000人強となります。

次に28 ページをご覧ください。総人口のうちの65歳以上の方についてです。こちらは平成60年ぐらいのピークまで増え続けます。29 ページは65歳以上の方の割合ですが、今年の24.2%がいずれ35%以上。つまり3人に1人以上となります。グラフでは平成30年ぐらいから横ばいになっていますが、これは足立区で比較的人口が少ない、現在50歳代の方が年齢65歳に到達する時期は、自然減と拮抗するためです。

その後、比較的人口の多い40代の方が年齢65歳に到達して、再び伸び始めます。高齢化の進展については、地方に比べれば比較的遅いですが、23区の中では早い方ですので、他区に先駆けて対策が必要だと言えます。次に30ページ、31ページは75歳以上の方についてです。グラフで一時減少するのは、これも比較的人口が少ない現在50歳代の方の影響です。次に32ページ、33ページは85歳以上の方についてです。要介護の方も増えていくと予想されます。

続きまして、34ページの生産年齢者数です。中位推計では平成37年度までほぼ横ばいですが、想定される開発動向がなくなって転入が少なくなりますと、65歳に到達する人口との差し引きで減少し続ける状況となります。なお、仮の話になりますが、現在は想定出来ない鉄道新線や新たな開発等が打ち出されたり、足立区の魅力がさらに大きく向上した場合には、生産年齢者や総人口の減少を若干緩やかにする可能性もございます。

次に36ページ。14歳以下の年少者数についてです。こちらはこれまでの微減してきた流れのまま減少を続けていきます。なお、外国人についてですが、ページを戻っていただきまして、7ページをご覧ください。青い折れ線グラフがこれまでの推移となります。平成23年まで増加してきたのが、東日本大震災の後減少しました。平成26年から再び増加に転じましたが、そのページは以前よりも急激になっているのが特徴です。以上です。

村上部会長：どうもありがとうございました。いろいろグラフが出ていて、かなり先の推計まであるのですが、正直日本全体がそうなのですが、かなりのスピードで高齢化と少子化が進むということは、このグラフからもすぐお分かりになると思います。こうしたことも踏まえて、基本構想を考える上での参考にしていく必要があると思うのですが、まずこちらの、人口推計の今の説明につきまして、何か質問等がありましたらご発言をいただきたいと思います。いかがでしょうか。よろしいでしょうか。数字もたくさん出てきますので、直感的にはお分かりになると思うのですが、細かいところまではなかなか推計なので難しいところもあるとは思いますがよろしいでしょうか。では、また何かありましたら議論の中で出していただければと思います。

## 2 第1回子ども専門部会における議論の確認について

村上部会長：続きまして次第2に移りたいと思います。第1回子ども専門部会における議論の確認についてというところになります。前回の議論の中身の確認と、それを踏まえて今日の中身を考える参考にしていただければと思います。その第1回目の議論の確認について、資料説明を事務局からお願いします。

基本構想担当課長：まず前回専門部会の内容を受けて追加した資料を順に説明させていただきます。最初に資料番号のない、表題が足立区の非正規雇用者比率についてと

あるものです。これは子ども・若者白書の関連で、足立区の比率についてご質問があった点です。円グラフの分数計算のところをご覧ください。足立区は非正規雇用者比率が 30.9%となりました。その下の国の白書の数値に対して、調査方法の違いがございしますが、やや数値的に高くなっております。

続きまして、同じく資料番号のない A 3 版の足立区教育大綱案をご覧ください。これは総合教育会議というものがございまして、そちらで策定中のものです。前回、生きる力のご質問があった件ですが、この資料の左下の囲みにある注 1。この中に記載があります。位置付けていく予定となっております。

続きまして、委員の皆様のみ配付の冊子ですが、平成 27 年度足立区基礎学力定着に関する総合調査調査結果報告書をご覧ください。区の北東部の外国人が多い地域で、学力水準が低下しているという点ですが、その関連性について分析した報告書ではないものの、北東部の特に中学校において目標値の通過率が低い学校がありました。中には英語の通過率が良い、英語の通過率について良い学校の 3 分の 1 程度の低さで、勉強が好きだという意識が低い学校も見受けられました。後ほどご覧いただければと存じます。

それでは A 3 版の資料子⑤と表示の子ども専門部会課題整理及び将来像等検討シート。それから資料番号のない A 3 版の第 1 回子ども専門部会のまとめをご用意ください。前回現状と将来の課題について意見交換をしていただいた内容を元に、論点等を整理し、部会としての将来像や基本理念の考案に向けたまとめの案をたたき台としてお示しするものです。修正や補足等の討議を今回、及び第 3 回目まで重ねながら固めていっていただきたいと存じます。なお、第 1 回子ども専門部会のまとめでは、各委員の皆様からいただいた意見に対しての区を取り掛かりの状況を左上の凡例にある記号で表示させていただきました。都合によりすべての意見について網羅しておらず失礼いたしますが、一方で結果的に既に取り組んでいるという二重丸の数が多く付いております。ただし、取り掛かってはいるものの、まだまだ課題解決に向けて取り組み続けている状況ですので、その点をお含み置きいただきたいと思います。

一つだけこの意見の中で完了しているものについてご紹介します。シートの左側の上から二つ目の囲み。待機児童対策のところにある一つ目の 3 歳児、4 歳児プログラムまでは広げてほしいというところですが、こちら 0 歳から 5 歳まで既に設定している所管課からの回答でした。これは完了しておりますが、他はまだ取り組んでいるものの、まだ課題解決、完了までは至っていないというもので、二重丸は多いものの課題が残っているというところでお含み置きいただきたいと思います。

それでは、前回の意見交換の内容について、株式会社地域計画連合より説明をさせていただきます。

地域計画連合：ではお手元の二つの資料と、前回のホワイトボードで振り返りをさせていただきます。こちらが前回、第 1 回で使用した模造紙になります。今ご覧になっているカラーの元のシートですが、そちらの黒いポチで意見が書いてあります。それ

がこの模造紙上の一つのポストイットに該当する内容がすべて入っている状態になっています。前回はざっくり振り返りますと、まず貧困というテーマでご議論がありました。また学校や保育の質と量という点でもご議論があったかと思います。その中で例えば待機児童だったり、幼児教育のあり方、障がい児への対策、教育に関わる主体の連携の必要性、そういったものもご議論がございました。また子どもが育つ環境としては環境づくりの話。そういったものも出ております。もう1点、貧困の方は、いろいろな立場の方がいらっしゃる中で、それぞれに応じた対策が必要だということで、一人親家庭などもその中に含まれています。また貧困につながる中退者へのサポートということで、例えば職業教育であるとか、多様な進路が選べるような基盤、土台を用意しておく、そういったご意見が出されておりました。

それを踏まえまして、まとめの方に今日の議論のたたき台になるように整理してございます。まずこちらをご覧ください。左下に水色の丸がございます。貧困の連鎖を断つための取り組みが必要ということで、例えば一人親家庭のサポート、中退者へのサポート、多様な進路や居場所づくり、職業教育といったものが皆さんから出されています。ここで前回議論でありましたが、論点として一番左下にオレンジ色の吹き出しがございますが、基本構想でこの貧困という言葉を使ってよいものかどうかといったことが皆様の中で提示されました。続いてこの紙の右側ですが、水色の丸が中程にございます。教育・保育におけるさまざまな課題への対応が必要である。この中で保育の話が意外と出たのですが、学校の話が課題出しにとどまっていますので、本日出来れば論点として挙げますが、子どもたちがどのようにはぐくまれるかといった視点でご議論いただければと思います。また下の方には、子どもや教育に関わるさまざまな主体ということで、いろいろな主体が連携する、また地域に開かれる必要があるというご議論がございました。論点としては子どもをはぐくむ、支える側のあり方とはという点についてご議論をいただければと思います。4点目の論点になりますが、一番上にございます。若い世代が惹き付けられる、そういったものが子ども部会としてのテーマとして一つ挙がっていたのですが、周辺自治体と比べて若い世代をどのようにして惹き付ければ良いのか。足立区の売りの的なものも少しご議論いただければと思います。

第1回を振り返りまして、こちらの資料⑤、検討シートの方に今のお話を文章化してまとめたものがここに記載されていますのでご覧ください。左側の枠が課題のまとめということで、今の時点で6点ほど整理させていただきました。まず1点目が子どもの貧困を解決する取り組みが求められている。2点目が若い世代が自立し活躍出来る取り組みが求められている。3点目が多様化する保育ニーズにも応えられるような保育の質や量の充実が求められている。4点目が学力の定着・向上のための教育の質の向上、教育環境の充実が求められている。5点目が子どもが健やかに心豊かに育つための環境の充実とありますが、これは大人との交流とか、ものづくりを見て育つ。緑や土に触れるといったところも含めて、こちらにまとめております。6点目が子どもに関わるさまざまな主体の連携が求められているということで、こちら6点整理さ

せていただきました。また下の方に二重線がございまして、その下にくらし専門部会からの提案とあります。くらし専門部会からも中退した人に対するケアや支援が必要だとか、高齢者と若い世代の関係づくり、交流や支え合いが必要ではないか。また、道徳やマナーの向上が必要ということが挙げられていまして、子ども専門部会の方でもぜひ取り上げていただきたいということでしたので、こちらに掲載しております。

今日は、右側の将来像の方に踏み込んでいく形でご議論をいただきたいのですが、前回のご意見の中にも出ておりました。足立区、今はワーストを改善する施策が多かったと。課題がたくさん出ていたのですが、これからは足立区の良いところを伸ばしていくべきだとか、未来に向けた視点が必要だとかそういったご意見がありましたので、前向きな未来につながる将来像について今日はご議論いただければと思います。

### 3 意見交換

村上部会長：どうもありがとうございました。ではこれまでの説明を踏まえまして、次第3に入りたいと思います。もし今のご説明に疑問がありましたら、冒頭に質問していただいてもよろしいかと思います。これから意見交換に入るのですが、時間が大体80分から85分ぐらいあります。前回、現状と課題を整理したのですが、保育とか就学前教育、あるいは高校レベルの若者のサポートといった話は割と出ていたのですが、小中学校を中心に学校教育そのものについてはまだ少し議論が必要ではないかというご意見があったかと承っております。それも含めて前半です。85分のうちの前半は、これまでの前回行った現状と将来の課題というところを、小中学校の学校教育も含めてもう少し整理をして、前回の続きという形で整理をしまして、後半は今日の一応ミッションは、将来像、あるべき姿とそれからそのための根本となる考え方、基本理念の柱を議論することが今日のミッションですので、そちらを後半進めていって、7割ぐらいは資料5の右側の将来像と基本理念のところを柱を固められて次回に進めるとよいかなと考えておりますが、やってみないと分からないので不安もありますが、皆さんご協力をよろしくお願いいたします。

では、そういった形でよろしければ、前半はまず先ほどの説明に対する質問、及び現状と将来の課題の続きということで、進めていきたいと思います。どなたからでも結構ですので、ご発言ください。

河本委員：小学校・中学校に関してという議論をというお話がありましたので、小P連を代表して、今感じていることを述べさせていただきます。まず小学校の学力というのは、ここ数年の取り組みでとても上がってきていて、実際に家庭環境、収入に限らず、子どもたちが基礎的な学力を身に付けられるということが、数字でも表れているということは、現在小学校に子どもを通わせていてとても実感しています。なので、今まで行っているそういう学力向上の取り組みとしてはとてもいろいろと良かったのではないかと考えています。

ただ、そこに学校に通えない。いろいろな家庭の事情で先ほどの貧困の問題もありますが、通えないお子さん。不登校ではないのですが、かなり遅刻気味で来るお子さんや、多子の家庭で下の子の面倒を見なければいけないなどのさまざまな家庭面の問題があり学校に来られない子というところに、学習支援という点ではどのような取り組みをされているのだろうというのが少し不安に思っているところがあります。学校に来ていれば補習授業や土曜授業などさまざまな取り組みがあるので、学力の低い子どもたちもそれなりに勉強する機会はあるのですが、そうでない子どもたちは放置されてはいないかという不安があります。

もう一つ、中学から高校の問題では、たまたまつい先日、同じ高校生の子どもを持つ母親 20 人ほどと会話をする機会がありました。その中で、3 名高校 1 年生で足立区の都立高校から中退されたお子さんがおりました。そのお母さんたちのお話をよくよく聞かせてほしいということで、気の知れた仲間でもありましたので詳しい内容を聞いてみると、確かに中学時代に学力がとても、そうですね、真ん中より下にいた 3 人ではありました。中学ではこの子たちが行ける都立を一生懸命斡旋し、そこを受験するように勧め、何とか足立区にある都立の学校に進学することが出来ました。そのお母さんたちの話によりますと、決してそこが好きなわけではない。確かに悪いこともした。そして、高校に行ってから学力は、確かに続けてよいものではない。けれども、1 教科 1 学期の中間でこれは落第点だと言われた時に、例えばそれを底上げするような授業やテストを受ける機会もなく、他の学校への転校を持ち掛けられたそうです。要は 3 人の方が一番感じているのは、足立区の学力向上、やはり足立区内の高校の学力を上げようという意識が強いせいか、いらない子を切り捨てているのではないかという悲痛な叫びのように感じました。

なので、確かに都立高校ですので、足立区でどうのということとは出来ないのかもしれないのですが、そのお母さんたちは結局、高校 1 年生で中退をしたのではなくて、中退をさせられたと。足立区にある都立の学校は、下を切り捨てているのではないかというご意見をいただきました。以上です。

村上部会長：ありがとうございます。非常に身近な住民の方の声も入っていたと思います。困難な子どもに対する学習支援というところで、これは足立区に関しては小中学校の施策になると思いますが、教育委員会の方でオブザーバー職員でも結構ですが、こういった取り組みをしているということがあればご発言をお願いします。

定野委員：例えばです、不登校、小中合わせると 700～800 人ぐらい確かにいますが、こうやって数が把握されているということは、席のある子どもについてはつながっているのです。その中の一部については、チャレンジスクールです。週になんべんかは学校でないところに通って、そういう学習支援を行うことをやっていますし、それから全く音信不通になってしまうことはないと思います。フリースクールに通っている子どもたちもいます。学習支援というところはそういうところで行われているという



ことですが、それが十分かということになると、今申し上げたチャレンジスクールも結構希望する方も多いこともあって、これはやはり充実させていくべきだと思っています。そういう施策についても手当てをしたいと思っています。

それからもう一つ、高校中退の話については、高校側は義務教育ではないので、赤字が続くと駄目だというのはあるし、それから出席してこなくなると出席日数で駄目だということもあるようです。昔のように犯罪に走ったとかそういうことよりも、むしろそういうことの方が多いと聞いているので、高校ではそこで彼らをもっと引き上げようというところまでは行っていないのかなという印象は受けています。都立高校の先生たちと話すと、それではいけないということは思っているし、その点では中学と高校の連携をもっと強くすれば、そういうことも出来るのではないかとすることは非常に感じています。

村上部会長：どうもありがとうございました。今のご指摘に関連する論点でも結構ですし、その他のトピックでもかまわないのですがいかがでしょうか。

鈴木委員：一つ質問と言うか、この第1回専門部会のまとめで、高校生世代にどのようなサポートが出来るかという四角の枠にバツが付いているのです。バツは終了とか取り組みがないということですが、このバツはどのような意味なのでしょう。

それで、いずれにしても最近例えば足立区では、江北高校に定時制があるのですが、これをやめてという話で進学校らしくそこに特化するという話なのですが。定時制がすべてよいと言うか、下の方の子を救えるとは限らないのですが、やはり定時制をなくすと行き場をなくす子どもが出てくる可能性もあると思っています。今のチャレンジスクールを増やすという方向もありますので、一律ではないとは思いますが。ただやはり東京都の話なので、これを足立区でどうしていくかというのはあるのですが、確かに中学から高校にということで、高校で中退すると実はもう行政なり役所ではほとんど手が届かない。でもそうではなくて、これからもう少し東京都も含めて連絡が取れるようにしよう、情報が分かるようにしようということではあるとは思いますが、そういう点ではいずれにしても中退してしまうようなお子さんに対して、やはりきちんと目を向けていく。手を差し伸べていく。はぐくんでいくと言うのでしょうか。これは前回もかなり言われましたが非常に大事だと思います。区として結構踏み出している部分があると思うのですが、さらに今後の基本構想の中でその辺が位置付けていけるとよいなと思います。

村上部会長：ありがとうございます。今質問が出ました。子ども専門部会のまとめの中に高校世代にどのようなサポートが出来るかというところでバツの印が入っているということで、具体的にどのようなことなのかという質問でした。事務局ないしはオブザーバー担当部局からご説明があればお願いします。

基本構想担当課長：最初に事務局から、所管から得た回答を元にご紹介します。これは回答は教育面ということで捉えられたようです。やはり教育ということでは、都立・区立という問題のところでバツにはなっていますが、付帯的な回答として、出身中学校があるわけですので、そことの相談とかのつながりがあれば、中学校の方でサポートしておりますとか、あとは就労面であれば若者サポステ、引きこもりに対するデイサービス、その他フラットスペースとか諸々の施策はございますので、そちらのアプローチと言うよりは教育面でのバツだということでございます。

定野委員：バツはとても心外です。先ほどお話をしたことも続けてやるつもりですし、例えば東京都といろいろ話をして、東京都の都立高校改革を進めていて、先ほど鈴木委員からお話があった定時制高校をなくすという部分も、要するに学校として全日制と定時制が一緒だといろいろ不都合もあると。では、単独の全日制にして、では定時制をどこに持っていくのかというのを考えているようです。僕の口から全部言うといけないので言いませんが、足立の中でも再編が進められていると伺っています。それは足立区にとってよいことではないかなと思います。定時制をやめるわけではなく、再編を考えているということがあるようなので、そういった意味では高校世代にどのようなサポートが出来るかという点では、バツではなくて三角ぐらいでお願いしたいと思います。

野辺委員：第1回子ども専門部会のまとめのプリントのところですが、いろいろ凡例が出ていますが、意見について何もワークがないということは問題外ということなのでしょうか。それとも何か他の意味があるのでしょうか。

基本構想担当課長：これはお詫びになってしまいますが、すぐ調査はいたしまして、とても日程的に回答が得られなかったということで無表示の部分と、中には現在の状態、例えば西新井は子育てをしやすいまちなどは課題とかそういったことではないので無表示と、少し整理が完全ではありません。一部はこちらの事務の関係で回答出来ないものもございました。申し訳ございません。

野辺委員：では後ほど回答していただけるのでしょうか。

基本構想担当課長：次回までに、そうなりますとまた期間もいただけますので、ご用意させていただきたいと思います。

野辺委員：分かりました。

村上部会長：必ずしもすべてに丸が付けられるかどうか分かりませんが、可能なものはということで行きたいと思います。

志自岐委員：少し分からなかったのですが、チャレンジスクールとフリースクール、これは区内にどれぐらいあって、実際にどれぐらいの生徒が通っているのでしょうか。あとはチャレンジスクールとはどのようなものかが少し分からないのですが。あとは先ほど不登校ではなくて、学校に来られない子どもがいるということだったのですが、その数が700～800人ということなのですが、これは全体の何%ぐらいになるのでしょうか。

定野委員：800人という数字は1%から2%弱といったところです。それから、30日以上長期欠席というのがルールなので、全然出てこない子どもばかりではないということが一つあります。手元に数字がないので、事務局からご紹介をしてほしいと思います。あとはチャレンジスクール・チャレンジ学級というのは、今100名ぐらい参加していると思います。需要はまだあると考えていまして、これは足立区が進めている事業です。フリースクールというのは、民間のNPOとかそういう団体がやっているところで、区内には二つでしたか。通っている子どもさんは10名ほどいて、この10名というのは学校でも把握をしていて、教育課程として認めていると言うかそういうところなので、そこは出席カウントでやってきちんと連携が取れています。

子ども家庭部長：子ども家庭部長です。チャレンジ学級は不登校気味のお子さんたちを、学校、それからげんきを通じて紹介をして、西新井でやっています。それから綾瀬にもあります。そこに通ってきていただいて、これは正式な教育課程の単位として認められています。先ほど教育長から話がありましたが、フリースクールは私塾の扱いで、正式には通っていても単位としては認められていないのですが、一定の条件を満たすと、現籍校といろいろ連携を持っております。一定の条件を満たすと単位として認められる状況にあるということです。文科省では今回法律の制定は見送られましたが、フリースクールを正式な学校として認めようという動きもあるようです。

志自岐委員：チャレンジスクールというのは学校でやっているのですか。

子ども家庭部長：場所は西新井にある子ども家庭支援センターげんきです。あとは綾瀬に1か所。区内の2か所でやっております。

志自岐委員：700人、800人が全員不登校というわけではなくて、行きたいけど行けない子どもなののでしょうか。不登校と、それから行きたいけど行けないという子どもの問題性は違うと思うのですが。そこも調査とか区別は付いているのでしょうか。

子ども家庭部長：手元に数字的なものがないのですが、一つは現籍校において、それから通っていくという形で、情緒や発達に課題のあるお子さんたちが療育を受ける場

が一つあります。これは週1回程度の通学です。それとは別に、不登校気味のお子さんたちをチャレンジ学級として、要するに現籍校に行けないということなので、別のところで学校教育をしている形です。

河本委員：今のことに関連してご質問なのですが、30日以上継続して学校に来ない子たちへのそういうチャレンジスクールという学習支援の仕組みがきちんとあることはよく分かったのですが、例えば先ほども申したのですが、小学校の子どもが幼稚園やきょうだいの面倒を見るために学校を週に1回か2回は来ると。あとはそういう貧困ということでは、給食目的には来るとか。ただ、一般の学校教育をまともに受けていないと感じられる児童はやはり長年小学校の母をしていると見えるところがあります。そこがそういう子たちへのサポートはないということなのではないでしょうか。家庭の問題だということで、学校には週に1回程度来ていけばよいといったものは、ここにはカウントされていないのです。

定野委員：カウントされていないですね。私も体感的に数倍はあると思いますし、クラスを見ている授業の外に置かれている子どもたちがいないわけではありません。これは学校では非常に大きな問題なので、校長を始め、教育関係者はきちんとしたフォローをしていくと。もちろん家庭訪問もしていますし、子どもさんが来るような仕組みも作っていて、個別のそういった台帳を持ってそういった情報が共有出来るようにということまではやっています。

子ども家庭部長：一つは今年度から始めた事業ですが、スクールソーシャルワーカーという制度を導入しました。これは従来のスクールカウンセラーが相談に乗るという形で、心理的なもののケアをやってきたのですが、これが家庭に乗り込んでいって、家庭の中にまで入り込んでいって、地域のさまざまな資源を有機的に結び付けて、行政支援だとか地域での児童委員さんだとか民生委員さんだとか、これらの方々の力を借りながら、家庭の中にまで入って問題を解決していこうというところです。まだ3名今年配置したばかりですが、ゆくゆくは全区的な展開をしていきたいと思っています。これに関しては、やはり国の方も全校に配置という方針を採っているようですので、それと歩調を合わせながら、必要であれば早い時期に全区展開をしていきたいと考えています。

村上部会長：ありがとうございます。今出てきているのは、小中学校の困難な子どもの学習支援という形で、不登校とそれから不登校に至らないまでも、通常の授業に完全に参加することが難しい子どもさんをどうするかというようなお話が中心になっているのだと思います。例えば先ほどの高校の中退の問題が出てきています。それに関してでも結構ですし、また別の論点でも結構ですので、引き続きご意見がありましたらお願いいたします。

岡安委員：先ほどフリースクールで教育長から、区内に2か所で10名程度とあったのですが、区外の含めたところでは押さえられているのでしょうか。人数です。それとフリースクールに関しては、足立区としてフリースクールに対しての支援、これをしているのでしょうか。

定野委員：フリースクールに対する支援は行っていないと認識しています。これを区として推奨しているわけでもないところなのです。今回いろいろ法律の中でも問題がありましたが、フリースクールを認めることによって学校に来なくなるのではないかという議論がたくさんありました。私もそこについて判断が付きかねています。フリースクールと言われている私塾が、本当に今後の教育課程としてよいものなのかもきちんと確認していかないといけないと思います。そういう点では、区としての支援は今のところは考えておりません。永遠に考えないという意味ではありません。

岡安委員：区外の資料はあるのでしょうか。

定野委員：私は頭がないので、区内しか記憶にないので、ないようです。すいません。

岡安委員：私の身近で結構区外のフリースクールに。区外と言っても、何県レベルですが、何人か行かれている方がいらして、相当いじめに遭って不登校になったのですが、ある方は北海道のフリースクールに合宿性なのですが、本当にすばらしい青年に今なっているのです。中学2年生から不登校になり、高校からフリースクールに行ったのですが、本当にフリースクールの情報というのをしっかりとすべきで。実は、私前に決算委員会でこれを取り上げた時に、足立区はフリースクールに関してそれは承知していますと、当時の教育長の答弁があったのですが、しっかりとこれから大事な視点なので、フリースクールに関して研究していきますという答弁がありました。フリースクールは大事な視点だと思いますので、これから足立区としてもいろいろ情報を集めて、先ほど教育長がいみじくも言われましたが、どのような支援が出来るのか出来ないのか。そういうところまで含めて検討していただければと思います。

村上部会長：引き続きいかがでしょうか。

河本委員：前回隣の中P連から小林さんから、中学校は今学力、学力ということで暗くなっているのではないかというお話がありました。私が小学校でとても感じるのは、昔がよいというわけではないのですが、一般の担任の先生たちに心にも体にも余裕がないように見えます。確かに学力は上がりました、子どもたちの。ところが、実際に私たちが子どもの頃の担任の先生というイメージでは全くなっているような気がします。昔の良かったところは、やはり20分休みは子どもと遊ぶ。放課後も子ど

もと遊ぶ。小学生ってやはり親以外の誰かに助けを求めてくださいと言っても、隣のおばちゃんに駆け込むのではなくて、やはり親以外の大人で頼れる人と言ったら、小学生の場合は絶対に先生だと思います。ただ、その先生が頼れるかという点、先生がいっぱいいっぱいなのは子どもたちにも見えているぐらいで、デスクワークもとても多い。確かに個人情報の問題があるので、家に持って帰って丸付けをするわけにはいかないのです。机に向かっている時間が長くなるのはとてもよく分かるのですが、子どもの人数が減ってきているとしたら、子どもたちに向き合う量というのは増えてしかるべきだと思うのですが、反比例して先生の仕事がどんどん増えて、例えば 30 年後の子どものことを考えるとしたら、30 年前に子どもだった私は、夏休みの先生の家に遊びに行って勉強を教えてもらいましたが、そんなことは絶対にあり得ないです。放課後、今で言う少しお金に難のあるご家庭のお子さんが転入してきた時に、残ってここまでの勉強やドリルを教えてやってくれと言われて、その子に毎日放課後つきっきりで私、勉強を教えた記憶もあります。その時でもやはり先生はそういう形で子どもたちを上手に、転校してきた子へのサポートですよね。子どもを含めてやっていた。そして、今でも年賀状で年に 1 回、お互いに元気ですかということを交わしている。

今の先生たちが 30 年後、卒業させた小学校の子どもに毎年年賀状を送っていらっしゃる先生がどこまでいるだろうかと。そういうところが人間的にどんどん欠けているような気がします。区の政策がどうかそういうのは、少しよく分からないのですが。実際に先生方がそんなに今忙しくデスクワークをしなければ、学校教育をしていられない状況なのではないでしょうか。

野辺委員：今の先生は学習に掛ける時間よりも、それ以外のことをしなければならぬ時間が多いわけです。例えば不登校の子どものお家に訪ねていたり、授業を妨害する子どもを制止したり。結局授業が成り立っていないところで、子どもたち、他のまじめにやろうという子どもたちも、勉強・授業を受けることが出来なくなっているような状況で、学力と言っても本当に先生たちは気の毒だなと思います。ですから、先生たちの精神的な病気にかかる方が非常に多く、私が関わっている学校でも何人もそういう方が出てきて、長期欠席、結局退職といった感じが多いのです。だから、担任の先生は本当に大変だろうと思うし、今の先生たちになり手がいないと聞いていますが、あのような状況では本当に毎日学校に行くのが嫌になるのは先生の方ではないかと思っています。

自分の子どもが教師をやっているのです、そういうふうに見てしまうのかもしれませんが、とにかく授業が成り立ちにくい、成り立たない。それをうまく操っていくのは、相当の精神力のある人でなければやれないのではないかと思います。あとは適当に流すか、どちらかになってしまうのではないのでしょうか。ですから、担任の仕事量というのは、デスクワークだけではなくて、やらなければならないことがいっぱいあります。ですから、学力向上につながるような授業をすることが難しい現状だと私は思います。

それと夏休みの合宿っていうのですか。名前が何かあると思いますが、中学校の勉強が進まない子連れて行ってマンツーマンでたくさんの先生をバスに乗せて5日やってくる。確かに成果は上がるというのですが、聞いた話ではありますが、この子はやれば出来るという子だけを連れていくという話もあります。やっても無駄な子は連れていかないと、事実かどうか分かりませんが、それは非常に費用も掛かるし。しかも金銭的にあまり恵まれない家庭という縛りもあるとも聞いていますし、では少し普通の生活をしている子で勉強が分からない子は連れていってもらえないならば、逆差別と言うか、不公平ではないかとも思います。

定野委員：最初の先生たちが、生活指導に時間を費やしているという点では、野辺委員から言っていたので、これは私から言いにくいので良かったなと思います。それから夏の勉強合宿については、出来る子連れていっているわけではなくて、生活指導に少なくとも問題がある子連れていけないのは確かです。全校で行きますから、トラブルが出てきますので、生活指導上問題がある子は連れていきませんが、お金のある子もない子も、もう少し頑張らせれば自信が持てるなという子連れていくのは間違いありません。ただ、それがすべてではなくて、今、私の方でも把握しているのは、実は勉強合宿に連れていけない子どもたちの中にも、いや、むしろそちらの方に多く、もっと支えてあげなければいけない子どもたちがいることは把握していて、これをどうしようかというのは考えなければいけないと思っています。

村上部会長：教員の多忙化というのは全国的な課題なので、足立区だけで解決するのは難しいところもあるのですが。ただ、足立区に行けば子どもと向き合えとか、足立区に行けば授業研究が出来るとか、そういうふうになればよいなと思います。あと前半については、5分ぐらいで終わりにしたいと思います。現状と将来の課題について、今まで出てきていないことを含めてぜひここで述べていただければと思います。

小林委員：私からは中学校に限ってなのですが、部活動というのが中学校ではかなり柱になってくると思うのですが、教育活動の中での部活動の位置付けというのがなかなか難しくなっている。それはやはり先ほどから言われているように先生が忙しいとかです。時間が取れないというだけではなくて、スタッフ自体が学校の規模によって数かなり違ってきているというのが大きいと思います。特に学区域の自由化によって、学校各学年1クラスしかない中学校があり、かたや11クラスの学校もあり、先生の数まるっきり違うわけです。そうしますと、その1クラスしかない学校というのは、どうしても部活動が衰退せざるを得ません。どうしても先生数が足りませんから、兼務と言っても2～3個兼務というのは難しいと思います。中学校の中で部活動というのはかなり、皆さん子どもたちの中では小学校の時に、中学校に行ったら部活動に入るのだという妄想があるのですが、どうしても出来ない。今はだから部活動をやっていない子の比率が非常に高くなっています。

やはり学校の先生に、部活動もやれというのはなかなか難しいのかなという現状もあると思います。文科省の方でも、外部講師の利用とかそういうものも考えているようです。あとはもう一つ、部活動の引率の問題で、必ず教師を入れないといけない。体育系の部活動は審判をしなくてはいけないという暗黙の了解のようなものがありまして、そういうものもやはり審判を雇うとか、大会の公式審判を先生ではなくて出来るだけお金を掛けて雇っていくなどです。そういうことも考えないと、部活動そのものがどんどん衰退していくと、学校の魅力もなくなって子どもたちも来なくなって、学力も下がって、といった悪循環が生じていると思います。

それと、これはもう政策的な問題もあると思うのですが、学校の規模の問題。今後児童・生徒がどんどん減る中で、学校をどう残していくのか。どう地域に愛される学校として残していくのかというところで、学校規模で大きなところばかり残って、小さなところはどんどんなくなっていく。でも、そうすると、その地域に全く学校がなくなってしまうなど、いろいろな問題が出てくると思います。

それに併せて、後は学校の広さです。特に体育系の部活動をするには、足立区はなかなか特に川寄りの地域は、千住あたりとかはグラウンドが狭くて、じっくり走ることも出来ないような現状です。逆に言えば、埼玉県とかそちらに近い方の学校は広いグラウンドで、広々皆さん出来るということで、かなり運動能力に差が出てくるのではないかと思います。学力と部活動で、ある程度相関関係があるのかなと。やはり元気に部活動をやって、毎日体がぐたくたに疲れて、次の日すっきり起きてまた学校に行く。学校でもそれなりに生活のリズムが整うというところで、ぜひとも部活動のことも考えていただきたいと思います。

あとはやはりこれから児童・生徒が減っていくというところで、また学校統廃合の話とか、それは学校だけの話ではないのですが、地域の大きな中での学校単位という編成もあると思うのですが、考えていかなければいけないのではないかと思います。

それと、あとは学校のスタッフというのは、先生だけではないスタッフが非常に減ってきているのではないかと思います。学校職員というところですか。非常に減っていて、昔はお茶を入れてくれる人とかいたんではなかったとか思うのですが。そういう方がどんどんなくなっていったら、給食の方も委託だし、なかなか交流と言うのですかね。なかなかお願いとかってというのは、突発的なお願いとかが多分出来ないと思います。そうすると、学校スタッフという中でも、コアな部分で学校運営というところに関わる人が非常に減っているのではないかと。あと、学校のリスク管理が非常に高くなっていて、何をするにも書類。何かあったらどうしようかということが非常に多すぎるのです。そこについては、逆に教育委員会として、リスク管理というのは学校から何か切り離せる部署とかが作れないものかと。リスク管理専門にやるようなチームが常に学校をサポートしてあげられないのかといったことも思います。法律的な問題も非常に最近絡んできて大きいと思うので、その辺を何かうまく校長先生だけではなく、うまくサポート出来るとよいなと思います。



定野委員：今の小林委員のお話に答えると明日になってしまうのでやめて、部活動のことだけ申し上げると、今学校の先生の負担が大きいので、外部講師やボランティア、そういった手は入れているつもりです。部活というのは子どもたちの居場所の中で大きな要素だと思います。これはきちんと充実していくべきだし、昨年学区域をどうしようかと言う時も、小学校は隣接区域に戻したけれども、中学校はそのままにして自由に行くというのは、部活動を考えたところが大きかったと思います。学校の校庭を急に広くすることは不可能ですから、そういった意味では学区域ということも踏まえて、部活動をどうするのかということ。それから誰がどう支援していくのかということも、これについてはきちんと考えないといけないと思っています。

鈴木委員：先ほど高校の問題で、定時制については私は廃止すべきではないと思っています。廃止するよりは、例えば高校は夜間だけだから3部制にすると、夜間は駄目だけど昼間なら行けるということで、そういう機会を作っていくことが大事だと思っています。今日は小学校の話を中心にしたことがあって、実は私、自分の孫が4年生で、今日は遠足で朝、弁当を作って出ていきました。ごく普通の子どもですが、やはり学校の先生の顔が見えた時と言うか、こちらから例えばいきいきの先生の顔が見えた、あるいは校長先生の顔が見えた。たまたま子どもが病気をしてお見舞いに来てくれた時などは、私も会ったわけですが、そういう意味の顔ではないのですが、何か交流しているとか、先ほど忙しすぎるという話がありましたが、聞くと報告事項も多くて、本当に忙しくて、その中でも子どもと向き合っている。そうすると子どもがいきいきとして。やはり小学校というのは本人が意欲を持って生きられると言うか、取り組めると言うか、そういう教育になると一番よいなと思います。これはずっと言われてきていることだし、自己肯定感だとか。そういう点では、少しいろいろな学力を上げる、点数を上げるためにいろいろアドバイスをするのはよいのですが、管理をすべきなのかとか、そういった面も感じます。もう少し先生方の自主性を活かして、交流が出来る、向き合える時間を作ってというあたりはね、少しこれからの教育のあり方。基本構想の話だから、そういう方向に少しね、盛り込めるとよいなと思いました。

村上部会長：ありがとうございます。後半に話をつないでいただきました。今のお話も含めて、もし将来像とか基本理念の中に、そういった自己肯定感だとか、教員が子どもに向き合える教育とか、そういったことも考えながら後半の話も進めていければと思います。

ではここでいったん時間が来ましたので、現状と将来の課題についてはここまでとさせていただきます。後半では、検討資料の右側にある将来像、あるべき姿。それから根本となるような基本理念について議論をしたいと思っています。ここでは質問はもちろん結構なのですが、出来れば意見を多く出していただいて、一つの柱のようなものを考えていければと思っています。前回とそれから今回のこれまでの議論も踏まえて、

現状と将来の課題を踏まえた上で、将来像・基本理念というのがこのようなものがよいのではないかというご提案・お考え・ご意見というようなものを多く出していただければと思います。検討シートの方にはキーワード案として四つぐらい掲げてあるのですが、これは一種の例でして、あくまで凡例でして、足立区独自のもちろん特徴が出るようなキーワードとか、フレーズがあるとよいかなと思います。この右側のキーワード欄にこだわる必要は全くございません。自由に出していただければと思います。

将来像、あるべき姿と根本となる考え方、基本理念についてはホワイトボードを使って出来ればと考えております。このような足立区を基本構想で目指すということを盛り込むとよいのではないかというものがイメージとしてありましたら、これは今まではどちらかというと現状分析だったのですが、今度は将来こうしようというようなものになりますので、何かイメージ等々ございましたら、自由に出していただければと思います。

岡安委員：議事録をザッと読ませていただいて、平成 15 年の時も同じような議論を結構して、学力・教育レベルの厳しい足立区だけでも、誇りを持ってやらなければいけないという委員がいたりしました。その中である委員が、足立新田高校、当時は非常に厳しかったのです。学力が。厳しい学校だけでも、そこから「アツキヨ」という名前の、障がいをお持ちのシンガーソングライターが非常に人気があって、北千住駅とかテレビにもラジオにも出たり、徹子の部屋にも出てきて、そういう人たちが出ることによって、ものすごく足立のイメージが上がった足立新田高校がピックアップされて、学力が上がるまでは行かないのですが。教育というものは本当に全体的に捉える必要があるのだという意見があります。今の足立区は総合力とかたくましく生きる力ですとか、学力だけではなく、本当に人間力を高めるといふそういうフレーズをよく使っていますが、やはり平成 15 年時もそういうところを伸ばして、誇りを持てる足立にしていくのが大事だと委員が言われていて、それは同感だと部会長が言われていました。

私も 15 年から 10 年以上たっていますが、やはり足立区も少しは変わってきましたが、やはり子どもたちが、夢や目標を持って、本当に自分のスタンスがしっかり取れるような、そういう目標を持たせるような教育が大事かなと。先ほど言ったたくましく生きるっていうそのところで人間力、総合的な人間力を培うようなそういう形が大事なのかなと思います。それを文言でどう盛り込むかはありますが。

それともう一つはこれは今ある子どものことがキーワードだけ見ると書いてありますが、やはり子育てに優しいと言うか、本当に子どもを育てるにも、まだ妊娠されている、あるいはこれから子育てをしようという若い世代が足立区に魅力を感じるような、そういうところも何か文言でしっかりと盛り込めるとよいという気がしています。具体的なことまでは考えていないですが。よく産前産後支援なんて言いますが、やはり子どもが生まれる前からの支援を充実していく足立区と言うか、そういうところによってしかも教育も学力もそれぞれ伸びていくけれども、それ以外のところでも

非常に足立区は魅力的な学校運営をやっているよという発信が出来るよいいなと思います。

志自岐委員：非常にいろいろな問題が出て難しいなと思ったのですが、学校が教育の基盤、柱だとは思いますが、今の時代、やはり学校だけでは子どもを支えるのは無理だという気が今はしています。特に不登校でいじめで学校に来られない子と、それ以外の理由で学校に来ない子、あまり登校してこない子もいろいろなタイプがあるのですが、例えば不登校ではなく少登校と言うか、そういう別のキーワードを作って、今ソーシャルワーカーを派遣するということがあったのですが、家庭でいろいろなこともあるのですが、それはその子どもたちの数が非常に多いならば、各ソーシャルワーカーが家庭に行くというよりは、もう少し別の解決策があるような気がします。

フリースクールに支援なしということがあるのですが、協働ってずっとキーワードになっていたのですが、教育とかそういうところにこそNPOを入れていって、その中で学校では難しい子どもたちをどう支えていくかといったことを区全体として考えていくことが、そういう方向性を作ることが必要だというのがあります。

あとはこれはもう大きな話になるのですが、教育は未来に対する投資だと言われていて、でも実際には日本ってあまり教育にはお金を掛けていないということが言われています。その辺で貧乏な足立区だからどこまで出来るか分からないのですが、きちんと育んでいますよと。子どもたちの教育に足立区は精いっぱいやっているというアピールをするような、何かそういう施策とアピールを両方やっていくのがよいと思います。

子ども家庭部長：今の志自岐委員のお話。先ほどのスクールソーシャルワーカーのお話があったかと思いますが、もう一つ不登校になる前。少登校の時期からなのですが、登校サポーターの派遣という制度があります。これは登校の習慣付けを狙いとして、自宅に迎えに行き一緒に登校し、時には相談室等で寄り添いの支援を行うという制度がございます。あまり数は少ないのですが、なかなか効果が上がっていないところもあるのですが、そういう制度があるということです。

村上部会長：他にいかがでしょうか。今までは私自身が感じたところと言うと、前回は含めて出てきた意見で多いのは、先ほど志自岐委員からもご指摘があったのですが、学校では難しいお子さんとか、さまざまなニーズに対して出来るだけ応えていこうという姿勢というのは、結局足立区は強いような気がします。もちろんいろいろな問題はあるのですが、例えば貧困層であるとか一人親家庭であるとか、あるいは高校中退であるとか。そういったさまざまな困難を抱える子どもさんに対しても、あるいは家庭に対しても、出来る限りのサポートを区としてしていこうという姿勢は、議論の中でもかなり根底にあるような感じがするので、そういった個々のニーズもサポートするような施策であるとか、あるいは多様性を許容するというようなことは何か基本理

念の中には、今までの議論の流れを見るとあってしかるべきではないかと思いました。

あとは将来のことを考えても、やはり多様性など、個別のニーズに対応するというのが大事で、これは少子化が進んでくると、例えば将来的には、外国人の子どもさんが増えてくるとか、あるいは経済的にもしかすると格差が拡大すると、よりいろいろなサポートが必要な子どもさんが増えてくるとか、そういったことももちろん考えられるので、これはやはり将来の社会変化ということを踏まえて、いわゆる画一的ではなくて、多様なニーズを出来るだけサポートするようなところは、将来像か基本理念のどちらかに入れたいと個人的に思います。それは議論の中でも出てきていますし、非常に皆さん意識をされていて、しかもやはりなかなか難しいけれども、一定の取り組みをされているところだと思いますので、これはやはり継続して打ち出していくべきではないかと個人的に思います。

野辺委員：新聞を見ていまして毎日のように殺人がありますよね。おばあちゃん・おじいちゃんを殺したとか、恋人を殺したり奥さんを殺したり、子どもが殺す場合も大人が殺す場合もありますが、本当に毎日あるということは、やはりみんなの心がずさんでいるのかおかしくなっているのか。勉強が出来なくても、学校に来なくても、命さえあれば生きていられるし、生きていれば何かよいことがあるので、命を大切に足立区のような感じで、もっともっとみんなが命を大切にしていかなければいけないのではないかと思います。

村上部会長：今回は出来るだけたくさん出していただいて、それを整理する形で次回まとめるということによろしいかと思いますので、こういったものを盛り込んだらよいのではないかとすることがあればおっしゃっていただければと思います。

小林委員：やはりいろいろな要因があるのですが、子どもは将来の世代なので、次世代の子どもを第一に宝として考える政策。すべてにわたって子ども中心に、子どものためにやっていかないといけないのかなと。だから、そのために親の仕事の環境とか、いろいろなさまざまな学習環境とか、そういうものもすべて子どものためにという一言が必要だなと思います。今、本当の子どものためにというのが抜けていて、社会的ないろいろな要因で子どもにしわ寄せが来ている気がするので、やはり第一義的に子どもを宝としてほしいと思います。

村上部会長：子どもの利益と言うか、子どもにとって最善のという視点は、これはどこかに入れた方がよいと思います。

志自岐委員：赤ちゃんとか保育の関係なのですが、保育料が少し足立区は高いのかなという気がするのですが。例えばそれはいろいろ理由があってそういうことになっていると思うのですが、だけど少し高いかもしれないけれども、本当に使いやすいいろ

いゝな保育のニーズ。一時保育とか、例えばお母さん・お父さんが映画を見にいく時でも預けられるというぐらゐのあらゆるニーズと言うか、窓口をいっぱい隙間を埋めていくような保育のシステムを作るといったことで、子育てしやすいまちのようなアピールで、例えば子育て世代を積極的に呼び込むようなことにつなげてはどうかと思います。

村上部会長：子育ては一つ柱として必ずあるので、何かやはり将来像の中に今おっしゃったようなことを入れておく必要があると思います。

定野委員：子育てしやすいという点では、足立区もいろいろな施策を進めてきているので、それを弁解するつもりは全然ないのですが。実はそれでは足りなくて、子育てするのが楽しいと思えるような仕組みや環境ぐらゐまで行かないと、今のお話は先々ないのではないかと思います。それで気が付いたのは、結婚して子どもが生まれたのだけれども、生まれた途端に離婚する家庭が多いという話がありました。母親教育ではなくて、父親も教育をしなければいけない。どのようなことかというところ、親が子育てをすることが楽しいと感じないとそういうことになるのではないかとということその時非常に強く感じました。そうすると、一人親になると貧困の問題だとか、子どもと接する時間がなくなるとか、子どもの心がすさむといったことにつながるわけです。だとすると、2人で子どもを育てるのが、あるいはもっと大きな家族が育てるのが楽しいと思えるようなものを作らなければいけないし、そういったものが多分子どもが生きていく意欲も生まれてくると思います。命を大切にすゝ、生きてるのが楽しい、そういった子どもを見ているのが楽しい、育てるのが楽しいというところにつながれば、多分子どももいろいろな目標を持って、学校に行くのも楽しいと思ってもらえると思います。今のお話を伺って、子育てしやすいだけではなくて、もう一つ行けないかなと今考えたものですから、お話をいたしました。

村上部会長：楽しいというのがキーワードとして出てきました。

早木委員：再開発地区とか子ども世代の人たちがどんどん入ってきて、そういうところに他区から来たのですが、本当に子育て世代の人たちがいっぱい周りにいて、私が来た時に思ったことは、遊ばせるところが結構多いなと。自分が子どもを2人育ててきて結構外で遊ばせる場所があるということで、皆さん来ていると思ったのですが。今と昔を比べて、外で遊んでいる子が本当に減ってきているのです。そういう意味で、足立区は公園の数は多いということですが、もっと子ども時代というのは外で遊んで、土いじりをしたり緑に触れるという遊びが生きる力を育てていくものだと思うし、小学校に入っても放課後でみんなと校庭を駆け回ったという経験が将来非常に大事なことになると思うし、それが地域愛とか郷土愛になってくると思います。

先ほど小林さんから部活動が廃れていると聞きましたが、やはり部活動も中学生に

とってとても大事で、外で体を動かす機会がとても大事だと思います。そういうのが減ってきているというのは、少し考えるべきだと思います。足立区はそれに力を入れていく。生きる力を育むという点で、教育とは別に、学力とは別に、子どもを育てることが子どもの体を作るということで、外で遊ばせるスポーツに力を入れていくのが大事だと思います。そこにまたサポーターが少ないということですが、地域のボランティアを導入して、みんなで育てていくという視点を持っていくのが大事だなと思います。

村上部会長：遊びとか生きる力というものがキーワードとして出てきました。他にいかがでしょうか。現状と課題から議論してきて、そこからどのような将来像を描くかというところで、何か今までの議論を踏まえて思い付くところがありましたらお願いします。

河本委員：先ほど教育長のお話にありました、親が楽しくというところなのですが、やはり今、そもそも親が、すべての問題に根本的に家庭が、やはり基本は家庭であって、というのがずっとネックにあります。実際にPTA活動においても、学校教育にそもそも関心がないそういう親御さんをいかに引っ張り出すかに私たちはとても毎年、毎日苦勞をしているところです。足立区に住む親同士が、横の連携をより一層図れるような、親同士が支え合えるような、そんなイメージのある言葉があるとよいなと思います。

村上部会長：今親同士の支え合いをどこかに入れた方がよいのではないかというご意見でした。今までの議論の中で、現状と課題の中で出てきているもので、まだ将来像の議論の中でそれほど出てきていないのが、高校中退の話などです。あとは若者世代のサポート。青少年世代のサポートというところがまだ議論の中でそんなに出てきていません。それだけに関して少し何か将来像が薄いかなという気がしたのですが。

志自岐委員：中退する子どもたちとか、あるいは100%高校に行かない、中卒で仕事をするとか、そういう子もいると思うのです。全然なくなることはないと思います。職業訓練って東京都とかそっち関係で押さえられている職業訓練校なども、都立なのですけど。例えば足立区自体、足立区に必要な人材、職人を作るような。その辺は少し制度的に都と区の仕事の分担がどうなのか分からないのですが、ドロップアウトしてもこんな仕事を身に付けると生きていける、自分の力で生きていけるといった、そういう学校ではないですが、訓練所のようなところも必要な気がしています。

村上部会長：これは要するに都と区の住み分けというところからは少し超えた将来像の提言があってもよいと思います。これは大綱では書けませんが、基本構想は先を踏まえてということなので、高校レベル、あるいは中学の後の職業教育であるとか、高

校中退者のサポートとか、そういったことは基本構想の中で具体的に書くかどうかは別にして、あった方がよいのではないかと個人的に思います。都との関係だから、管轄だからということにこだわるのではなくて、基本構想の中ではあってもよいと思います。他にいかがでしょうか。

今までのキーワードをまとめますと、一つは子どもにとって最善であるといった視点が一つと、それから親とか地域にとって心地のよい、あるいは子育てするのが楽しいというような、親とか地域とかにとっての足立区といったところです。それから、子どもに身に付けてほしい資質というようなところで、生きる力とか人間力とかたくましく生きるとか命を大切にするというところがあると思います。私からの提案は、多様性に対する配慮と言うか、多様性を大事にする足立区というようなところが一つあるかなと思います。あとは職業教育です。中学校を出てからのこともそのサポートを。これは子どもに身に付けてほしい資質と似ているかもしれません。生きる力というのが職業教育に結び付くので、大きくは今言ったような子どもの利益とか最善というところと、親・地域にとっての足立区の子育てというところと、子どもに身に付けてほしい資質というところと、その多様性のようなところです。四つぐらい今のところ大きく柱として、将来像とか基本理念。今、将来像と基本理念と一緒に議論していますが、そういったところが出てきていると思います。

四つで足りるのかどうか。他にも柱として重要なところがあれば。あるいは、もう少し個別に例えば保育であるとか、高校レベルの教育であるとか、あるいは小中の学力問題であるとか、教師の多忙化であるとか、もう少し個別の将来像のようなものがあってもよいかもしれません。

どうまとめたらよいかを今考えているのですが、一つはこの柱を無理矢理四つほど申し上げたのですが、まだ追加するものがあるというので出していただくとか、あるいはもう少し具体的な将来像のようなものをご提案をいただくあたりだと思います。

鈴木委員：柱になるような話はないのですが、今はどちらかというと子育てがしやすいとか、親の側からのアプローチだと思います。例えば高校生ぐらいになると、例えば他の地区で自分たちで集まるセンターがあって、その運営を自分たちで決めると。で、自分たちでローテーションを決めて、何をやるか、誰が使うかとかそういうのを決めてやっていくところがあって。足立区でも今子ども館もそういうことになっているわけですが。例えば高校生ぐらいになると、居場所が意外となくて、部活をやっていればよいですが、そうでないとなかなか居場所がない。で、居場所があって、そこがしかも自分たちがここで言うと未来を担う世代が集まり活躍出来る。活躍と言っても、表彰されるような活躍ではなくて、自分が出せると言うのでしょうか。あとは役に立っているとか、少なくとも居場所、いるところがあると。そういうのが少し子どもをイメージした場合に必要なと。特に高校生ぐらいを見るとです。多様性の一つかもしれません。

あともう一つだけ思ったのは、結局高校中退だと学力の問題もあるし、若干障がい

を持っているとか、あるいはメンタルの問題だったり、いろいろな側面があるわけです。だから、今足立区としてもかなりそういう点では若者サポートステーションを作ったり、そこに臨床心理士を置いたりがありますが、何かそういう中退してしまうような高校生たちに、もうちゃんとフォローですかね。結果としてはフォローですかね。つながっていくというそういう足立区であれば、そこからやはり本人の意欲なり生きがいと言うと大げさですが、そういうものを引き出していく、育てていけるような。足立区だけではないのですが、日本を背負っていけるような。

同時に人にいろいろな、例えば中退だとマイナスのイメージがあるのですが、非常によいものを持っている場合が多いのです。それが引き出せるような、活かせるような、そういう仕組みと言うか、そういう足立区と言うか、なるとよいなと思ったりしました。

村上部会長：今主に割と高校生ぐらいでしょうか。居場所の問題であるとか、あるいは例えば中退したとしても、それをプラスに出来るような環境を作るとか、サポート・フォローは出来るようなまちづくり、そういった視点を今出させていただきました。これも一つ、特に中高生以降のことを考えた時に柱になり得るものかなと思いました。

野辺委員：これは年齢に関係のないことですが、大体我慢する力とか、優しさとかが足りなくなっていることがたくさんあると思います。例えばいじめとか、それによって自殺をするとか、大人の場合ですとネグレクト。面倒くさいからやりたくないなと思ったらやらなくなる、我慢する力がないということです。あとは小さい赤ちゃんを虐待で殺してしまったり、それもやはりいけないことなんだ。やめなくちゃというのはどこかにあると思うのですが、それが我慢出来ない。要するに、我慢する力や優しさがなくなってきている現実なので、みんな心なのですが、もっと心をきちんと育つように今から、小さい時から協力していかなければいけないなというのをずっと私、言い続けているのですが。見えないものだからなかなか人の心には訴えにくいのかもかもしれませんが、心を大切にすることです。お願いします。

村上部会長：これはくらし専門部会から、道徳やマナーの向上という形で要望が出ていますので、入れておいて検討すべきところだと思います。

定野委員：今野辺委員からお話があった我慢、優しさですが、親を見て子どもは育つので、そういうのを知らない親が虐待すると、またその子は大きくなって子どもを虐待するというサイクルになってしまうのです。だからどこかで断たないといけないだろうと思います。それは多分幼稚園・保育園・学校だけでは駄目で、その親をどうするのかということも考えないといけない。先ほど子育ては楽しいと言いましたが、そういう厳しい面も必要だと思います。

村上部会長：いかがでしょうか。後半まだご発言されていない方からありましたらお



願います。

岡安委員：先ほど早木委員が言われていました、みんなで子どもを育てるというこの視点は非常に大事かなと思っています。地域で支えるというのは書いてあるのですが、このキーワードにも子どもたちを地域で支え育むまち。もしこのキーワードを使うかどうかという問題がありますが、使うのであればここに地域でみんなでというのを一言入れてもらった方がよいと思います。

それともう一点、若い世代を惹き付けるというのはまとめの真ん中のところに書いてあるのですが、これ全体が若い世代を惹き付ける施策になるのだと思います。これを充実していけば。ただ、高校生の中退も 300 人台、今足立区ではいるわけでして、そういう高校生世代、また 20 代の若者が下を向いて暗く歩いているような足立区であってはならないという意味では、これは具体的な話になりますが、例えば話ですが、キーワードとしていきいきとか笑顔とか、一人ひとりが輝くといったようなものが、そういう足立区という表現もよいのかなと思っています。

それと、先ほど部会長が言われたのはすばらしい表現だと思うのですが、多様性。多様なニーズを多様な施策で受け止めていくというのは、すべてこれに入ると思うのですが。本当にそういうことで、これ 1 本あったら終わるような表現なので、これも柱として、それが枝葉になるようなそういう表現が入っていくとよいのかなと思いました。

村上部会長：議論の中で皆さん大切にされているなという印象を外から見ていて非常に思いましたので出させていただきました。

小林委員：子どもたちが最終的にどこに行き着いてほしいのかを今考えているのですが、やはり足立区で働いてほしいと思うので、やはり足立区で働くとか入れられるとよいと思うのですが。最終的に地域の担い手になってほしいということもあるので、足立区で働くとなると、やはり足立区には職がないといけないとか、経済的に出来なければいけないとか、いろんな意味で広がりが出てくるのかなと思いますのでお願いします。

村上部会長：今のは他の部会にも要望として出していただいた方がよいかもしれませんので検討をお願いしてよろしいでしょうか。

志自岐委員：地域で育てるとかと言うと、今までの概念で言うと、町会とか自治会のようなことになるのですが、今それだけでは難しいと言うか、支え切れていないと言うか、なかなか機能が発揮出来ていないので、少し問題になっているわけで、これでもくらし分科会とも関わると思うのですが。地域のその町会が機能することも大事ですし、あるいはそれ以外の何か別の形なり何なり、学校区域、学校域での何かとか、地

域でとかみんなでとか言うと、言葉はよいのですが、具体的に中身をどうするのと言った時に、非常にいろいろあるので、やはりそこは10年後、20年後を考えて、高齢者も増えていく上で、なかなか地域が、今までの地域でやっていけないのではないかというところがあるので、そこに何を入れていくかとか、今新しい地域とか、新しい何かを、単に地域で育てるというだけではない何か必要かなと思います。

村上部会長：これは将来のことなので分からない面もあるので、逆に言うと、何か新しい芽が出た時にそれを育てられるような施策であるとか、そういったものも新しい芽を取り込んでいけるような視点を持つとかです。何か今までの概念にないようなものが出てきた時に、それを子育てとか教育にうまく結び付けられるような視点を持つということはあってもよいかなと思いました。

そろそろ時間ですが、次回も議論は出来ると思います。もうお一人いかがでしょうか。

渡辺委員：皆さんのご意見を伺っていて、本当にいろいろなことが集約されてきたと感じました。特に小P連、中P連の方々のご意見は、要は子どものためにやるべきことは全部やっていこうよと。そういう足立区でいようよという言葉で、それぞれ出てきて非常によいなと思いました。では子どものためなのだけれども、大人はどうするんだろうということを今思っています。やはり子どもの選択肢を絶対に狭めてはいけないということを思いました。

今出た地域の関わりという意味で言うと、例えば今年千住が大祭がいくつかあって、祭りというイベントは子どもたちにとっても非常に良いなと思いました。これが学校の運動会だけではなく、地域の運動会もこれから盛んになっていくと思いますが、そういうところに参加をしてくださる家族や子どもはよいのですが、そこに出てこない方々に対しては、やはり行政が手厚くしていけるような足立区であってほしいと思いました。

で、くらし部会からの提案の中に、道徳やマナーの向上が必要。それから、高齢者と若い世代が関係すべきという意味で言うと、やはり道徳やマナーについては、オリンピックという大きな節目があって、他国の方々がたくさん日本に来られるその時に、異文化がぶつかり合うわけですから、日本人の良さというものをもう一度認識するようなマナー教育や道徳教育を進めるということと。それから、高齢者の方々とふれあいというのは出来る足立区であってほしいと感じました。

村上部会長：どうもありがとうございました。高齢者と若い世代の関係というところは、確かにあまりこれまで具体的にはなかったもので、これもぜひ次につなげていきたいと思います。

ではそろそろお時間になりました。どうも本日はありがとうございました。少しどうなることかなと思っていたのですが、皆さんのおかげでかなりいろいろな意見が出

てきて、まとまりそうな雰囲気になってきましたのでどうもありがとうございます。  
次回ももう一度専門部会がありますが、どうぞよろしくお願いいたします。それでは  
事務局から事務連絡をお願いします。

#### 4 事務連絡

基本構想担当課長：次回の開催についてご連絡いたします。10月26日月曜日の午後  
2時から4時でございます。会場は本日と同じです。もしもご欠席となる場合には、  
これまでと同様に事前にご連絡をいただけると幸いです。本日は誠にありがとうございました。  
なお、お車でお越しの方は出口付近の係員にその旨お伝えください。お忘れ物のないよう  
にお気を付けてお帰り願います。ありがとうございました。

午前 12:00 閉会